保育学生における多文化共生保育を考える授業の在り方の検討
～留学生との交流会を通して～

A consideration on childcare education classes to learn about multi-cultural coexistence
—Through the exchange meetings with international students—

倉畑　萌[1)]・　三輪 実希[2)]

Kurahata Moe and Miwa Miki

抄録：保育学生が保育内容「人間関係」の授業の中で「多文化共生保育」を考えるきっかけとして本学の留学生との交流会を実践した。2回の交流会を通して、保育学生は様々なことを考える機会となった。例えば、相手に伝えるための方法として簡単な日本語に変換することだけでなく、視覚的な資料を活用することジェスチャーを用いるなどの体験を通してノンバーバルコミュニケーションの重要性をより感じることができた。また、文化の違いに驚きながらも、その文化への興味・理解へと気持ちが変容している姿が見られた。保育者養成校として、学生が外国にルーツのある人々と実際に関わる機会を設けることは大変有意義であると言える。留学生にとっても、実際に日本語を使用しながら日本人学生と会話することで、日本語及び日本の文化・人への理解へとつながった。

キーワード：多文化共生、保育者養成、授業実践、コミュニケーション、異文化理解

Ⅰ．問題と目的

在留外国人数は令和4年6月末の時点で中長期在留、特別永住者数を合わせて2,961,969人であり（2022年：法務省）、増加傾向にある。就学前の外国籍の子どもの人数は令和4年6月末時点での0～6歳が126,400人となっている（2022年：法務省）。保育所に在籍している子どもの人数の調査としては、日本保育協会が調査した平成20年度保育の国際化に関する調査研究報告書がある。報告書によると平成20年度調査時保育所に在籍している外国籍の子どもの人数は13,337人であると示されているが、在留外国人数の増加に伴い、現在は保育園に在籍している子どもの人数も増えている可能性が高い。しかし、日本保育協会の報告書によると、外国人児童が入所している保育所の状況等を約半数の自治体しか把握していないということが示された。把握している50自治体において、公立保育所1,647か所、私立保育所3,397か所で多文化保育が実施されている。

都道府県あるいは地域によって差はあるものの、保育者として外国にルーツのある子どもの理解を深めていくことは、今後さらに重要になってくると考える。幼稚園教育要領第1章総則、第5には、特別な配慮を必要とする幼児への指導として「海外から帰国した幼児や生活に必要な日本語の習得に困難のある幼児については、安心して自己を発揮できるよう配慮するなど個々の幼児の実態に応じ、指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとする」と書かれている。保育所保育指針においても、第2章の保育の実施に関して留意すべき事項として「子どもの国籍は文化の違いを認め、互いに尊重する心を育てるようにすること」と書かれている。また、第4章の保護者の状況に配慮した個別の支援として「外国籍家庭など、特別な配慮を必要とする家庭の場合には、状況等に応じて個別の支援を行うよう努めること」と家庭への支援についても書かれている。保育所保育指針解説の中では、「保育者等はそれぞれの文化の多様性を尊重し、多文化共生の保育を進めていくことが求められる」とされており、幼稚園教育・保育のなかで文化の多様性の理解と個々に配慮した保育の実施が求められている。その一方で、日本保育協会の報告によると保育所において外国人保育のための保育士研修を行っているか否かについて全国147園から回答を得ているが、半数以上の69.4%の園が研修を行っていないとしている。韓（2018）の調査では、八尾市で最もベトナム人が多く入所している公立幼稚園・公立保育所・民営認定こども園を対象としている。多文化保育実践に関する現職教育の研修を受けているのは、アンケートに回答した67名の保育者のうち、26名（39%）であった。現場の保育者の現状だけでなく、保育を志す学生の多文化保育に対する知識・理解力の不十分さは先行研究でも示されている。例えば、堀田（2009）の調査によると、「多文化保育論」を履修しており、多文化保育に比較的関心の高い大学生においても、保育所保育指針の内容の認知度や外国にルーツのある子どもへの保育に関する意識は、多様化する保育ニーズに十分に対応できる水準とは言えないとしている。また、韓（2018）は、保育者の子どもの異文化理解のための保育に関す

1) 短期大学部幼児教育学科　2) 留学生別科

る知識の不十分さと保育者養成課程や現職教育における保育者の専門性を育成する必要性について示唆している。三井・石井・林ら（2018）も、保育者養成段階において、多様性に関する自身の認識及び、保育実践を行うための基礎となる多文化共生の視点を育成し、強化する必要があるとしている。

これらを踏まえると保育者を志す学生にとって、実際に外国にルーツのある人々との交流を行い、学びを深める機会を設けることが有意義となるのではないだろうか。

品川（2011）は、外国にルーツのある子どもの保育に携わる保育者の意識の研究を行っている。現場の保育士がどのような意識を持ち多文化保育を実践しているのかについて検討を行った結果、保育者らは日系ブラジル人児童と日本人児童の違いを認識した上で、保育のなかで様々な工夫をしていた。また、外国にルーツのある子どもの受け入れには肯定的な保育者が多かったとしている。上野・石川・井川ら（2008）による聞き取り調査では、外国にルーツのある子どもを受け入れたことによるプラスの効果として、①保育者の異文化理解が進み、保育者としての幅が広がること、②日本人の子どもの異文化理解が進むこと、③外国人の親子が園を通して日本になじむこと、の3点を示している。一方で堀田（2009）による大学生への調査によると、「日本語を母語としない子どもを積極的に受け入れたいと思うか」という問いに対して、受け入れに積極的だったのは半数に満たないとしている。このような違いは実際に外国にルーツのある子どもと関わっているか否かが影響している可能性もある。池谷（2016）が日本人学生を対象として、留学生との交流授業が与える影響について調査を行っている。この調査においては、日本語教員養成課程における授業のなかで、交流及びアンケートの実施がなされている。その結果、キャンパスの中という普段の環境のなかで多文化共生を体験することが、日常生活における外国人との接触増加に繋がることや留学生にもわかる日本語で交流することが、文化や言葉の壁を乗り越え易くし、相手への興味や交流への積極性を促すと示している。

保育者は多文化共生保育そのものに対する知識だけでなく、実際に外国にルーツのある子ども達やその保護者と関係を築いていく必要がある。そのため、本研究は、多文化共生保育を考える授業の在り方を検討する。そのために、留学生との交流会を開催し、その意義と効果について検証することとした。実際に留学生という同世代との交流を通して「多文化共生の保育」についても考えるきっかけになるだろう（注1）。また、留学生においても日本人学生との交流についての意識調査を実施することによって、日本人学生及び留学生双方にとっての交流の成果について検討することとする。

Ⅱ．研究方法

（1） 交流会の開催

保育内容「人間関係」の全15回の授業のうち、留学生との交流会を2回実施した。同授業は2クラスで開講されており、どちらのクラスにおいても2回ずつ交流会を開催した。1回目の交流会は2022年6月28日（Aクラス）、7月1日（Bクラス）に実施した。2回目の交流会は2022年7月19日（Aクラス）、7月22日（Bクラス）に実施した。どちらの交流会も、大学キャンパス内の演習室にて実施した。

（2）対象者

保育内容「人間関係」を受講している幼児教育学科の学生85名及び留学生別科の学生8名

（3）交流会の内容

1回目の交流会の内容は、それぞれのクラスにおいて8グループに分かれた幼児教育学科の学生が留学生全員に対して「日本の保育・子ども」について順番に紹介していくという形で実施した。具体的には、「食」「遊び」「文化」という3つのテーマを設定しその中からグループごと1つのテーマについて紹介を行った。事前準備として、それぞれのグループ内でテーマに合わせたプレゼンテーション資料を用意した。また、テーマに合った留学生別科学生への質問を1つ考えた。

2回目の交流会の持ち方については、1回目の様子を踏まえて幼児教育学科の学生と相談して決定した。留学生別科の学生から事前に質問を受け付け、その質問に答えることとその上でさらに日本の保育・子ども達の様子についてプレゼンテーションをすることとした。実際の交流会では、幼児教育学科の学生がグループごとに分かれて座り、その輪に留学生別科の学生が参加するという形式で実施した。

（4）アンケート調査

池谷（2016）が実施したアンケート調査を参考に、アンケートを作成した。交流会の前と2回の交流後に、幼児教育学科の学生と留学生別科の学生それぞれにアンケート調査を実施した。アンケートは紙媒体とした。回収方法は授業中に配布し、その場で回収した。アンケートは無記名とし、回答学生が特定されないように配慮して分析を行った。

1）幼児教育学科２年生の交流前に実施したアンケートの設問は以下の通りである。
設問①　海外旅行に行ったことがありますか（修学旅行・家族旅行　含む）
設問②　問①で「はい」と答えた人にお尋ねします。場所と回数について教えてください。
設問③　２週間以上の海外留学をしたことがありますか
設問④　問③で「はい」と答えた人にお尋ねします。場所と回数について教えてください。
設問⑤　普段の生活で留学生（外国人）との交流はありますか（ネットでの交流含む）
設問⑥　問⑤で「時々ある」「よくある」と答えた人にお尋ねします。その留学生（外国人）とはどのような関係ですか（複数回答可）。
設問⑦　留学生についてどのような印象を持っていますか
設問⑧　留学生と交流することについてどのように思っていますか。
設問⑨　多文化共生保育　という言葉を知っていますか
設問⑩　問⑨で「知っている」と答えた人にお尋ねします。多文化共生保育について知っていることを書いてください。
設問⑪　日本語を母語としない子どもを保育する上で必要な知識・技術は何であると考えますか。

2）幼児教育学科２年生に交流後に実施したアンケートの設問は以下の通りである。
設問①　交流会について、良かったと感じた点はどんなところですか
設問②　交流会について、やりにくいと感じた点はどんなところですか
設問③　交流会を通して、自分の中で何か変化した点等はありますか。具体的に教えてください
設問④　「保育者」としての視点で今回の交流を振り返ったとき、どのように感じましたか

3）留学生別科学生に交流会前に実施したアンケートの設問は以下の通りである。
設問　日本人学生との交流についてどのように思っていますか

4）留学生別科性に交流後に実施したアンケートの設問は以下の通りである。
設問①　日本人学生との交流を終えて、どのように感じましたか
設問②　交流についてよかった点はどんなところですか
設問③　交流についてやりにくいと感じた点はどんなところですか

（５）倫理的配慮

本研究は、中部学院大学・中部学院大学短期大学部における研究倫理委員会で承認を受けた上でアンケート調査を実施した（承認番号　C22--0002）。研究内容及び個人情報の保護、研究参加や同意撤回の自由については、対象者に口頭と文書で説明した。対象者の調査への参加をもって同意とみなした。

（６）分析方法

アンケート結果の内、幼児教育学科学生の自由記述についての回答を一文ごとカード化し、KJ 法を用いて分類し、分析を行った。留学生別科学生については、８名分のアンケートについて考察した。

Ⅲ．授業実践

１回目の交流は、幼児教育学科学生の発表がメインとなったことで、幼児教育学科の学生と留学生との交流場面は多く見ることはできなかった。PowerPoint を活用して資料を作成したグループもあるが、実際にけん玉を持参するなど、それぞれのグループが工夫を凝らして準備を行った。しかし「プレゼンテーションをする」という意識が強く、留学生とのやりとりではなく、一方的に情報を伝える姿や原稿をそのまま読む姿が目立った。そのため、説明の際の細かな語句にまで配慮することなく話す学生達の姿があった。また、留学生に対して行った質問の際も、留学生の回答に対してさらに尋ねることはなく、回答を聞いて終わっていた。そこで、１回目の交流の際の留学生の反応の少なさや実際に理解できなかった言葉について留学生に聞き取りをして、その内容を幼児教育学科の学生に伝えた。これらの反省を踏まえ 2 回目の交流準備をする中で、よりやりとりができる交流会の持ち方を学生と相談することとした。プレゼンテーション形式での実施ではなく、各グループに分かれ、1・2 名の留学生にそれぞれのグループに入ってもらうことで、より近い距離で交流をもつことになった。

２回目の事前準備では、１回目と同様に実際のおもちゃやイラストを提示するだけでなく、PC 等の IT 機器を活用

しながら行った。事前に聞いていた留学生からの質問に答えるための発表資料には、1回目の発表を踏まえ、より理解しやすいように「るび」を打つことや、視覚的にわかりやすいようにイラストを活用することや実物を持参するなど各グループが工夫しながら準備した。

2回目の交流では、その場で留学生が学生に質問する姿が見られ、幼児教育学科の学生が言葉を選びながら時にジェスチャーを用いながら説明を行う姿があった。また、留学生に対しても事前に準備していなかった質問をしたり、急遽遊びを変更したりと、臨機応変に対応する姿があった。最初は緊張していた様子の学生達であったが、交流会後には「時間がもっと欲しかった」、「楽しかった」という声が聞かれ、充実した時間を過ごすことができたことが伺えた。

交流会後の授業においては、近隣の保育園で実施されている多文化共生保育の様子や外国にルーツのある子ども・保護者との関わりにおける配慮事項について指導を行い、多文化共生保育に対する理解を促した。

次に留学生側から見た交流会について示す。来日して今に至るまで、留学生は他国の留学生との交流はあっても、日本人との交流は全くなった。留学生の周りにいる日本人と言えば、担当教員しかいない状況であった。しかも、例年と比べ来日が2か月ほど遅れたことで、対面授業ができたのは6月中旬であったことも、日本人との交流ができなかった大きな原因である。このような状況で日本語はもちろん、日本での生活にもまだ慣れていない留学生が今回の交流会に参加した。

そのため、交流会前の留学生は緊張している様子だった。このような交流会の経験が今までなかったことも理由の一つだが、何より日本語で交流することが一番の不安材料となっていた。日本語を間違えること、日本語が通じないかもしれないということ、そもそも日本語が理解できなかったらという不安を抱えていた。日本語に関しては自国で学習してきたものの、実際に日本に来て日本人と日本語で話すとなると、自信がなく心配ばかりしていた。日本語の理解力は決して低いわけではないが、日本人学生の日本語がわからないということと、留学生が話す日本語が日本人学生に理解してもらえなかったらという、二重の不安があるように見られた。

その反面、交流会を楽しみにしていた様子も伺えた。直接日本人と日本語で話すことができることはもちろんだが、日本の文化を理解することができることや、日本人と友人になれる機会になるかもしれないという期待を持っていた。留学生は交流会がきっと楽しい経験になるに違いないと思い、交流会ができる嬉しさも伝わってきた。

2回目の交流会後は一番の不安材料であった日本語の問題は完全には払拭できなかったものの、自分（留学生）の話す日本語を相手（日本人学生）が理解しようとする姿勢を見せてくれたことを喜んでいた。緊張していたようだが、実際に交流しているときはそのことを忘れるくらい自由に話していた。今まで経験したことのない交流会だったので、楽しむ姿が見られた。

また、日本人学生の説明が日本語のみならず、留学生が理解できるような工夫がされていた。絵を用いた説明だったり、実際にやってみたり、わかりやすい日本語で説明してくれたのは、留学生にとって安心できることであった。その甲斐あって、日本人学生の説明がよく理解でき、様々なことを知ることができ、勉強になったという留学生もいた。また、自分（留学生）の国のことや言葉に興味を持ってくれて簡単な挨拶を覚えてくれたことが嬉しかったという留学生もいた。

Ⅳ. 結果と考察

（1）日本人学生の意識

交流前のアンケート回答者数は85名のうち83名、交流後のアンケート回答者数は85名中75名であった。

交流前のアンケート調査の結果として設問①の回答については、表1にて示す。海外旅行の経験がある学生は23名、ない学生は60名であり、7割以上の学生が海外渡航の経験がないことが分かった。

表1　設問①　海外旅行に行ったことがあるかという問いに対する回答

0回	1回	2回	3回	4回	5回以上
60人（72.3%）	9人（10.8%）	8人（9.6%）	0人（0%）	1人（1.2%）	5人（6.0%）

また、設問③の回答については、表2にて示す。留学経験がある学生は1名、ない学生が82名であった。留学経験があると答えた学生は社会人学生であるため、現役入学の学生は一人も留学経験がないことが分かった。設問①・②の回答結果から、学生が海外の文化等に接する機会が少ない状況で学生生活を過ごしてきたことが分かった。特に対象となった幼児教育学科2年生は、高校3年生になる直前にコロナ禍となっており、修学旅行の中止等を含め海外に出かけることが非常に困難な状況下で学生生活を過ごしてきた。また、短大は実習等があり長期休暇が非常に短い

ことに加えコロナ禍であることが、海外渡航の経験の少なさの要因の１つになっている可能性がある。

表２　設問③　２週間以上の海外留学の経験が何回あるかという問いに対する回答

0回	1回	2回	3回	4回	5回
82人（98.8%）	0人（0%）	0人（1%）	0人（2%）	0人（3%）	1人（1.2%）

設問⑤の留学生（外国人）との交流の頻度についての結果については、表3に示す。「全くない」と「あまりない」とを合わせると、8割以上の学生が日常生活の中で外国人との接触がほとんどないことが分かった。

設問⑤で「時々ある」、「かなりある」と答えた学生の設問⑥の回答結果を見ると（表4）、「アルバイト先」という回答が最も多かった。留学生（外国人）と交流がある学生自体が少数ではあるものの、職場に留学生（外国人）がいる環境の学生はおり、それぞれの文化の差異の理解やコミュニケーションをとる機会があると見られる。次いで、SNSなどのネット上の友人が多かった。こちらも少数ではあるものの、SNSの普及により日本にいながら海外の人々とつながる機会が身近になっている可能性が考えられる。池谷（2016）が、接触の多い留学生（外国人）との関係について学年があがると自分自身からの能動的な知り合いが多くなっていたと考察しているように、今回の調査においても能動的な知り合いが多いという結果となった。

表３　設問⑤　普段の生活での留学生（外国人）との交流があるかという問いに対する回答

全くない	あまりない	時々ある	よくある
54人（65.0%）	13人（15.7%）	8人（9.6%）	7人（8.4%）

表４　設問⑥　設問⑤で接触の多い留学生（外国人）とはどのような関係かという問いに対する回答（複数回答）

大学関係	大学以外	アルバイト先	留学先	ネット	その他
1人	1人	8人	2人	4人	1人

設問⑨の「多文化共生保育」という言葉の認知については、「知っている」が4名、「知らない」が79名であった。この結果より、これまでの学びの中で「多文化共生保育」についてはほとんど触れられてきていなったという現状が明らかとなった。今回の留学生との交流を通して「多文化共生保育」を考えるきっかけとなりうるという点で交流会を実施する意義があることが示唆された。

設問⑦・⑧の自由記述については、回答ごとに分類をおこなった。その結果、設問⑦の留学生に対する印象については、「特にない」という意見を除くと、「尊敬」、「努力家」、「留学生の人柄」、「日本への興味」、「コミュニケーションの不安」、「留学生同士の関係」、「ネガティブな印象」という7つに分類することができた。「尊敬」には、「日本に来て、母国語ではない言語で勉強していて尊敬する」、「言語の違う場所で学ぼうとしていてすごいなと思う」といった留学することに対する印象を挙げたものであり、尊敬の念を抱いている学生が多く見られた。「努力家」には、「勉強を頑張ろうと努力している」、「日本語を話せるように頑張って勉強しているイメージ」という意見であり、勉強熱心さを印象として抱いている学生も多く見られた。「日本への興味」には、「日本について興味がある」、「日本の文化を知りたい人たち」といった意見であり、留学生は日本に対して好意的な人々として捉えていた。「留学生の人柄」には、「明るい」、「穏やかなイメージ」といった意見が見られた。「留学生同士の関係」には、「留学生同士、仲がよさそう」、「留学生のみでかたまって行動している」といった意見が見られた。これらは、留学生と実際にキャンパス内ですれ違うことや食堂等で会う機会はあることから、挙げられた印象であると考える。このように、ポジティブな印象は多くあったが、「少し怖い印象がある」、「よくわからない」といった「ネガティブな印象」に含まれた意見や、「日本語が伝わらない」、「言葉が通じるか分からない」といった「コミュニケーションへの不安」に含まれた意見を抱く学生も少数ながら見られた。これは、これまでの経験の中で留学生を含めた外国人との交流の少なさが故に「よくわからない」、「知らない」ことが、「怖い」という印象につながってしまっている可能性が考えられる。

設問⑧の交流会についてどのように感じているかについては、「期待感」、「異文化理解」、「コミュニケーションの不安」、「視野の広がり」という4つに分類することができた。「期待感」には、「めったにない機会なので楽しみたい」、「自分からは関わる機会がないからいいと思う」という、これまで関わる機会のなかった留学生（外国人）との交流を単純に楽しみにしている意見が見られた。「異文化理解」には、「文化の交流ができるためいい刺激になると思う」、

「海外の様々な文化を知ったり日本との違いも交流出来たら良い学びになると思う」といった多文化に触れる機会として捉えている意見が見られた。「コミュニケーションの不安」には、「言葉が通じないので気軽に話せない」、「相手の言葉が分からないとき、どうやって関わればいいのか分からないので不安」といった意見が見られた。これは、留学生に対する印象を尋ねた際にも見られた意見であるが、交流会を実施するとなるとその不安感がさらに高まるようで、「コミュニケーションの不安」に分類される意見は多数見られた。「視野の広がり」については、「人との繋がりができるのはうれしいし、自身の視野を広げるためにもぜひ交流したいと思う」、「日本人の意見だけでなく、海外の人の意見を聞くことができるから、違った視点を見つけることができると思う」といった、文化の違いから生じると考えられる価値観や視点の違いに目を向けている意見が見られた。

設問⑪については、表現の違いはあるものの「子どもの母国語・文化の理解」と「非言語コミュニケーション」という2つの意見が見られた。学生が授業や実習の中でこれらのことが必要であることは理解していることが分かったが、それを体感する機会がどの学生にも十分あったとは言いきることはできない。

交流後のアンケート設問①～③について、それぞれの回答を分類した。設問①交流会について良かった点に対する回答は、「異文化理解」、「コミュニケーション」、「留学生との関わり」という3つに分類することができた。「異文化理解」には、「他国の文化を知ることができた」、「ネットとは違った外国の文化、日常について知ることができた」、「日本で行っていることと共通のこともたくさん見つかり、遠い存在だったのが近くなった」、「日本のことを再認識できた」という意見が見られた。昨今は、ネットで検索するだけで多くの情報を得ることはできるが、交流会を通して実際に会ってやりとりすることで、ネットの情報では知る事ができない生の声を聞くこと、そして伝えることができたと考える。また、異文化を理解する中で、母国である日本についての理解を深めることにもつながっていた。互いの文化の共通点、差異を実感することで、様々な環境で育つ子どもに対する理解が深まると考える。その意味で、今回の交流会を通じて、学生が他国への興味・関心を持つことができたのは大きな収穫と言える。

「コミュニケーション」には、「言葉の大切さを学べた」、「伝えることの大変さを知った」、「身振り手振りイラストを使ってコミュニケーションがとれた」、「伝えるためどんな工夫をしようか考えながらスライドを作ることができた」という意見が見られた。外国をルーツとする人々とのやりとりにおいて言語を用いたコミュニケーションの難しさ、その人の母語もある程度知っておくことの重要さを改めて確認したとともに、非言語的なコミュニケーションを活用することで、より気持ちが通じ合うことを体感する機会ともなった。

「留学生との関わり」には、「色々な国の人と関われたこと」、「留学生と関われたこと」、「『日本が好き』という気持ちが留学生の方にあることを知ることができた」といった意見が見られた。普段は、キャンパス内ですれ違っても関わることなかった人々との交流を純粋に楽しめた様子や、留学生に対する理解が深まった様子がうかがえた。

設問②交流会について、やりにくいと感じた点については、「コミュニケーション」、「準備不足」の2つに分類することができた。「コミュニケーション」については、「どの言葉ならわかり、分からないのかが分からなかった」、「日常的に使っている言葉でも外国の方だと分からなくて伝わらなかった」、「私たちがいつも使っている日本語では難しく、どのように伝えようか迷った」、「こちらも正しい日本語を使わないと日本語を勉強中の留学生には理解しづらいこと」、「細かい表現が伝わらなかった」といった意見が見られた。日常的に使っている言葉や日本人同士であれば通じることも、かみ砕いて説明することが必要であったり、ニュアンスの説明に苦労したりした様子がうかがえる。易しい日本語を使用して話すということは、保育の場でも同様のことが言えるはずである。外国をルーツとする子どもに限らず、言葉を獲得途中の子ども達に対して正しい日本語で話すことや、易しい言葉で話すことは重要である。大阪府の幼稚園・保育所で、外国にルーツのある子どもに担任として関わった・関わっている保育者への調査を行った日浦（2003）によると、困っていることとして、「言語」と「異文化理解」が挙げられている。言語については、子どもに関することと保護者に関することとで分けられている。特に保護者に関しては、「保護者は日本語が分からないため、保育方針や保育上の連絡についてコミュニケーションがうまくいかない」という内容の記述が主であったとしている。保育現場においては、単に事実を伝えるだけでなく、保育方針を含めて伝えていく必要が出てくる。学生の回答の中に「普段使っている言葉、例えばケンカという言葉の説明が難しかった」という記述があった。今回の交流においても、日本の文化や保育の中で頻繁に使用される言葉、当たり前に使っている言葉を易しい言葉で言い換える必要性、保育の内容として適切に伝えていくことの困難性を学生は体感することができたと言える。「準備不足」については、「時間が足りなった」、「準備する時間が短かった」という授業自体への不満を訴える意見が見られた。

設問③交流会を通して、自分の中で何か変化した点についての回答は、「異文化理解」、「コミュニケーション」、「留学生（外国人）への理解」、「多文化共生保育への興味」という4つに分類することができた。「異文化理解」には、「他の文化を知ることは楽しいということに気付けた」、「異文化に興味が持てた」という意見が見られた。設問①でも似た分類となったが、交流前との比較という点で考えると、交流への不安感が交流を通して異文化を知る楽しさ・母語が異なる人との交流することの楽しさへと変化したと言える。

「コミュニケーション」には、「言葉は違っても交流できるんだとやってみて実感できた」、「伝わりやすい、分かりやすい言葉選びをするように心がけようと思うようになった」、「言葉では伝えられない時の非言語コミュニケーションもとても大切だと思った」という意見が見られた。相手の立場になって考え、やりとりの際の言葉を選ぶことや非言語コミュニケーションを多用するようになったという変化が見られる。2 回の交流会を実施したからこそ改善する余地があったと言え、複数回に渡る交流会がより学生にとって学びが大きいことが明らかになった。

「留学生（外国人）への理解」については、「勝手に『怖い』と思っていたので、今回の交流会を通して、とても話しやすくフレンドリーな方だと思った」、「外国の方への苦手意識があったが、それが少なくなった」という意見が見られた。交流会前のアンケートにおいて「ネガティブな印象」を抱いていた学生がいたが、交流会後のアンケートでは留学生に対するネガティブな印象を記す者はなく、ポジティブな印象へと変容したことが伺える。交流会の中では、保育で行われる遊びを一緒に行うグループや、留学生の母国の写真を見せてもらったり音楽を聞かせてもらったりと、保育以外についても互いに教え合う場面が見られた。2 回の実施ではあるが、同じ時間を共有し、同じ遊びを行い、互いの人柄を感じられる瞬間があることによって互いの理解を深めることにつながったことが明らかになった。

「多文化共生保育への興味」については、「外国籍の子どもの親の対応について分かった」、「外国籍の子どもの理解をもっとしたいと思った」という意見が見られた。留学生との交流を通して、「多文化共生保育」についての関心が高まったことが伺える。

西村（2017）が、保育者自身が異文化に対する抵抗感を持たず、親しみを持つことや異文化に対する寛容さや理解する姿勢を持つことが求められるとしている。今回の交流を通して、学生自身は異文化を知ることの面白さや日本との差異、母国が異なる人々とのコミュニケーションの難しさと楽しさを体感することができた。これは、学生にとって多文化共生保育を実践していくためのきっかけとしては非常に有意義であったと考える。

設問④「保育者」としての視点で今回の交流を振り返ったとき、どのように感じたのかについては、これまでの回答で出てきたような「異文化理解」、「コミュニケーション」という 2 つの意見が見られた。特に、コミュニケーションに分類できる回答の中で、「視覚情報の重要性」を感じた学生が多く見られた。松山・石井・韓ら（2021）では、課題はあるものの、多文化保育における保育者の「困り感」の解決方法の１つとして、視覚的保育教材の有効性を示している。今回の交流の中で、学生が「視覚的資料」の重要性とその活用方法を体感したことで、今後の保育の実践の場でも生かすことができると考える。

（２） 留学生の意識

留学生の意識調査では、交流前のアンケートでは、全員「日本人学生との交流会は初めてだからとても楽しみ」というように日本人学生と話すことを楽しみにしている様子が見られた。しかし、その一方で全員が、「日本語が上手ではないから心配している」といった自分の語彙力への不安について記述していた。

交流会後のアンケートでは、参加した留学生全員が全体的によかったと答えていた。具体的には 2 つの点が挙げられる。

1 つ目は説明の仕方である。「絵や説明の紙などを使って説明してくれた」、「ゆっくり話してくれた」などと日本人学生の説明に対する感想が多く見られた。日本人学生が分かりやすい言葉を使って説明することを心掛けたり、用紙に文章を書いたり実際に遊びながら説明をしたりしたことで、留学生の理解がより深まったようである。

次に、活動を通して日本人学生について理解することができたことである。アンケートには、「折り紙を教えてもらえて良かった」、「遊びのやり方を教えてもらえた」といった記述が見られたが、実際の交流会においても日本人学生から折り紙を教えてもらったり、料理の作り方を教えてもらったりしたことを喜ぶ留学生の姿があった。一緒に何か取り組むことで一体感を覚え、友人ができたという感覚も得られたように見られる。お互いに相手のことを考え、活動できたことはいい経験になったと考えられる。

改善すべきこと、要望として出された意見は、時間が短く足りなかったということである。「できれば全員と話したかったが、時間制限があり全員と話せなかったことが残念だった」という記述が見られる。徐々に交流会に慣れてきたこともあり、もっと話したい、もっと知りたいという気持ちになったからではないかと考えられる。

もちろん、そのためには留学生自身の日本語力を高める必要がある。まだまだ日本語力が足りないと痛感した留学生もいた。交流会で留学生の質問を日本人学生に理解してもらえなかったことから、一番の問題は日本語であろう。これは交流会前も不安材料として出されていたが、交流会後も改めて感じたことであった。しかし、この経験が今後の学習意欲につながることが一番の収穫となったと言える。

交流会には、一方的ではなく相互理解が必要である。それが今回の交流会では少なからず見られたことは、何よりの収穫であった。

Ⅴ．まとめ

実際に海外渡航をするだけでなく、今回のように留学生と交流し、互いのことを理解する機会を設けることによって、国際化が進む保育現場においても抵抗感なく保育者が外国にルーツのある親子を受け入れ、対応していく力を養成していくことが可能であることが示唆された。

今回の留学生との交流会を通して、保育を志す学生は自らの体験により「異文化理解」、「コミュニケーションの在り方」について考えることができたことに意義があったと言える。「異文化理解」については、日本と海外との差異を理解した上で、その多様性を受け止めていくことの重要性を学ぶ機会となったと考える。また、「コミュニケーション」については留学生との交流の中で、伝えることの難しさと伝わる喜びの両面を体験することができたと考える。

保育者は人的環境であり、子ども達は保育者の姿勢を見て育つものである。保育者自身が多様性を認め子どもと向き合う姿は子どもにも伝わる。保育者養成課程の段階から多様性について理解できる場を設けることによって、多文化共生保育の実践に向けての基礎的な力の養成の一端を担えることが明らかになった。

日浦（2003）で示された保育者が感じる言語に関する困難さとして、「早く園生活に慣れさせよう『適応』させようとするあまり、子どもの母語についての配慮に欠ける」という子どもに対する記述を挙げている。今回の交流に対する回答の中に、外国にルーツのある子どもにとっての母語の意味や重要性を体感したという記述はなかった。「母語の理解の必要性」という回答は見られたが、コミュニケーションをとる際に彼らの母語を理解しておくと伝わるという意味合いでの記述であった。日浦は、「母語が肯定的で積極的な自己意識の発達やアイデンティティの確立の上で重要な意味をもつことを保育者が理解することが求められる。」と指摘している。交流会後の授業の中で、母語の重要さについて指導はしたものの、学生がそれを体感できるよう今後の交流会の持ち方については検討していく必要性がある。

今回は、保育内容「人間関係」の授業の中で交流会を行っており、この交流会の間に少なからず留学生と日本人学生との関係が築かれたと見ることができた。交流会だけにとどまらず、お互いに情報を発信し理解し合える機会を持ち続けることができれば、保育を志す学生にとっても留学生にとっても今回の交流会の意義をさらに評価できるのではないかと考える。

注１）　本稿においては、多文化保育、多文化共生保育、多文化共生の保育とを区別せずに使用している。

引用文献

1）日浦　直美，多文化共生社会の保育課題に関する研究（１）保育者と保護者のかかわりにおける障壁について，日本保育学会大会論文集，56，688‐689，2003

2)法務省　令和４年６月末現在における在留外国人数について　2023年３月１日閲覧
https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00028.html

3）堀田　正央，多文化共生社会における保育士の専門性向上に関する研究，埼玉学園大学紀要人間学部篇，9，159‐163，2009

4）池谷　知子，留学生との交流授業が日本人に与える影響と意義，神戸松陰女子学院大学研究起票　文学部編，5，55―70，2016

5）韓　在熙，多文化保育実践における保育者の認識についての研究―八尾市の事例から―，四天王寺大学紀要，65，435－452，2018

6）厚生労働省，保育所保育指針，フレーベル館，2017

7）厚生労働省，保育所保育指針解説，フレーベル館，2018

8)松山　有美・石井　章仁・韓　在熙・林　悠子・三井　真紀，多文化保育に関わる保育方法の実践と課題―保育者の「困り感」と視覚的保育教材に注目して―，日本福祉大学子ども発達学論集，13，13－22，2021

9）三井　真紀・石井　章仁・林　悠子・韓　在熙・松山　有美，保育現場にみられる多文化共生と環境構成の原理（1）：A幼稚園の事例から，紀要visio，48，15‐20，2018

10）文部科学省，幼稚園教育要領，フレーベル館，2017

11）日本保育協会，平成20年度保育の国際化に関する調査研究報告書（2023年３月１日閲覧）
https://www.nippo.or.jp/Portals/0/images/research/kenkyu/h20international.pdf，2009

12）西村　浩子，保育者養成機関におけるICTを活用した異文化理解の取り組み―海外の日本語学習者との交流体験の効果―，松山東雲女子大学人文科学部紀要，25，171－181，2017

13)品川　ひろみ,多文化保育における保育者の意識―日系ブラジル人児童の保育を中心として―,現代社会学研究，24，23－42，2011

14）上野　葉子・石川　由香里・井石　令子・田淵　久美子・西原　真弓・政次　カレン・宮崎　聖乃，長崎市における多文化保育の現状と展望，保育学研究，46（2），277‐288，2008